

脊の低いとがった男

小川未明

青空文庫

太郎たろうが叔母おばさんから、買かつてもらつた小刀こがたなは、それは、よく切れるのでした。あまり形かたは、大おおきくはなかつたけれど、どんな太ふとい棒ぼうでもすこし力ちからをいれれば、おもしろいように切きれるのでした。

太郎たろうは、いままで持もつていた小刀こがたなを捨ててしまいました。その小刀こがたなは、いくらといでもよく切きれなかつたのです。太郎たろうには、よくとぐことができなかつたのにもよりますけれど、もとから、その小刀こがたなは、よく切きれなかつたのでした。紙かみを切きるにも、ひつかかるようであつたり、また鉛筆えんぴつを削けずるにもガリガリ音おとがして、よく切きれないのでありました。それにくらべると、こんどの小刀こがたなは、ひじょうによく切きれたのです。紙かみを切きるのにもほとんど音おとがしなければ、また鉛筆えんぴつを削けずるのにもサクリサクリと切きれて、それは、おもしろかつたのであります。

そんないい小刀こがたなを持もつことのできた太郎たろうは、幸福こうふくでありました。いつも、鉛筆えんぴつの先さきは、木きの香かがするようにきれいに削けずられていて気持ちきもちがよかつたからです。太郎たろうは、かばんの中なかへ、その小刀こがたなを失うしなわないように大事だいじにしまつて、やがて、学がっ校こうの終おわつた鐘かねが鳴なると、いつものように、急いそいで、我わが家やの方ほうへ帰かえつてきました。

途中、太郎は、桑 圃の間を通つたのであります。この道は、毎日通らなければならぬ道でしたが、このときは、ただ太郎一人でありましたから、右を見たり、左を見たりして、道草をくつてやつてきました。

すると、一本、桑の枝が目にはいりました。もし、この枝を根もとのところから切つたら、じつにいいつえが造られたからです。また、つえなどを造らなくとも、その根もとはじつに太く、そして枝は、おもしろく曲がりくねっていて、見るばかりでも好奇心をそらせるようなものでした。

「あの枝がほしいな。」と、いつて、太郎は、ぼんやりとたたずんで見ていましたが、ふと彼は、自分のかばんの中に、切れる小刀がはいっていたことを思い出したのであります。

太郎は、にっこりしました。あの小刀で切りさえすれば、どんな枝でも切ることができると思つたからです、彼は、カバンの中から小刀を出そうとしました。そして、だれか、見てはいしないかと、あたりを見まわしました。もし、百姓が、見つけたなら、きつと走つてきてしかるからであります……。太郎は、うしろを振り向いたときに、びつくりしました。なぜなら、そこには、脊の低い、頭のとがった男が青い顔をして立ってい

たからです。

太郎は、桑の枝を切るどころでありませんでした。急に、歩き出しますと、その男も太郎について歩いてきました。

太郎は、気味が悪くなりましたが、だいたんに振り向きました。そしてこの見なれない男を見ると、かえって、小さな男のほうが、びくびくしているらしかったのです。このようすを見て、太郎は、急に、気が強くなりました。

「俺は、切れるナイフを持っているのだぞ！」といわぬばかりに、かばんの中から、小刀を取り出しました。

男の顔は、ますます青くなりました。太郎は、この不具者は、いったい何者だろうと考えましたから、

「おまえは、だれだ！」と、太郎は、男に向かっていいました。

男は、うらめしそうな顔をして、太郎を見ました。

「坊ちゃんは、私をお忘れなさったのですか？」といいました。

太郎は、こんな男を知っているはずがないと思いました。

「僕は、おまえなんか知っていない。きつと人違いだろう……。」と、太郎は答えまし

た。

「あなたは、私をよく知っていなさるはずです。私こそ、ほかに、知っている人はないのであります。私は、工場町で生まれました。そして、どうかしんせん方のところへゆきたいものだ。そうすれば、私は、その方のために、朝晩、どんなにでも働こうと思つていました。……それが、こんな有り様になつてしまった。これというのも私の不運です……。」と、青い顔をした、脊の低い男はいいました。

「僕は、そんなことは知らないよ。だいいち、おまえのいつていることが、僕には、わからないのだ。なんだか、僕が、おまえをいじめたようにとれるじゃないか？」

「そうです。私は、坊ちゃんに、罪のないのにいじめられました。もっと、役にたち、もつとこの世の中に生きていたかつたのを、あなたは、私をかわいそうとも思わずに、苦しみぬいて捨ててしまわれました。考えると、うらめしいのであります……。」「

太郎は、なんだか、この青い男のそばにいるのが怖ろしくなつて、駆け出しました。

その晩のことです。太郎は、床についてから、昼間学校の帰りに、出あつた、脊の低い青い顔の男のことを思い出しました。けれど、すぐに、彼は、眠つてしまいました。

「坊ちゃん、昼間は、なんで逃げ出してしまったのです。あなたは、あんなに切れるナイフを持つておいでなさるくせに……。しかし、このまえのナイフのほうが、どれほど、思いやりや、友情があつたかしれませんが。私は、いま窓の下で、横たわりながら、そう思つています……。」と、青い顔の男は、いいました。

太郎は、身動きをしました。その瞬間に夢からさめたのでした。

あくる日の朝、彼は、起きるとまず、机の抽斗を開けて、友情のあつたという昔のナイフを出してみました。そのナイフは、もう赤くさびています。彼は、念のために窓の下へいつてみました。そしてなにか、そこにないかとあたりを探索しますと、自分が、おもしろ半分にその頭を削った、短くなつて捨てた一本の鉛筆が、かなしそうに落ちていたのであります。

——七月九日——

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」 講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

※表題は底本では、「脊《せ》の低《ひく》いとがった男《おとこ》」となっています。

※初出時の表題は「脊の低い尖った男」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年5月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

脊の低いとがった男

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>